

自由投稿「半年を過ごして」

京築支部 京築県土整備事務所 山口智則

県職員になって半年が過ぎたが、目の前の業務を行うので精一杯という日常は特に変わりない。しかし、どのような出会いがあるのか、公務員の実際の立ち位置はどうなっているのかなど、自分が何者になったのかについて知りたいというふうに、心を躍らせていた。4月の自分は日に日にいなくなりつつある。それと同時に、今度は実際の職務の面で様々なことを学ぶ日々が始まり、興味の対象が段々と仕事の中身に移っていったのは必然であるが、こうして振り返ってみるとなんとなく寂しい気にもなる。7月には九州北部豪雨もあり、自分の関わる土木職というものが社会基盤を担っていることを実感する大きな出来事だった。北部豪雨当日、自分は水防業務のため事務所で夜を明かすこととなり、中継や最新情報を確認しながら、この先のこういった自然の猛威と向き合い続けられないといけないのかとまじまじと感じていた。また、事務所にいたせい、特に自分が何かをしたわけでもないのに、これまで守られる立場であった自分が守る側の人間になったのだという感情も自然と沸いてきた。まだ、何ができるかと言われれば、答えにくいだが自覚を持つという意味では、やはり大きな出来事だったと感じている。

業務内容、取り組み方について振り返っていくと、「わからん」この4文字と向き合った半年だった気がする。この半年を通して、ときに説明を受けても自分が行っている業務の内容がわからないことがあった。多くの場合はそもそも説明のときにでてきた単語が分からず、内容が頭に入ってこず、話の内容をイメージできないという感覚だった。初めのうちは上司の時間を奪うことと、自分の現状のまずさを天秤にかけながらどこまで聞いていいのか迷いながら、あやふやにしていた部分があった。しかしながら、日々そのような環境にいると別の感情も出てきた。それは、「人間どこまで経験をつんでも知らないことの方が多い状態で生きている」というものだった。冷静に考えてみると日々様々な分野であらゆる新しい知識があふれているのに、すべてを知ることなどありえない上、他人以上に知識がないのに「わからん」の4文字ですませることほど愚かなことはないのではないか、そう考えるようになった。そして、たとえ時間的な余裕がなくても、今自分が身につけるべきは質問の仕方や疑問をもった際に調べる手法なのではないかと気づかされた。他にも、ある会議中に上司から言われた「いつまでも貝のように黙っているつもりか」という一言もこの半年を象徴するものだったと感じている。上記で示したような遠慮がちな姿勢があらゆる面で無意識ではあるが、自分の思考を停止させ、疑問やシチュエーションを想定しながら話を聞くなどの自発的な姿勢を殺していたように思う。そこで、「わからん」という単語が頭に出てきたときの考え方を次のように変えるよう心がけた。「わからん、ならどうするのか」。本当に単純な考えだが、どうしてもわからないと感じるときはくるので、そうしたときにどのような対応をすべきかをいち早く考えるよう習慣づけるよう意識した。そして、10分で結論が出ないときには、周りに相談するというような最低限自分でできることをやるというような当たり前のことを徹底した。まだ、今現在で何かしらの手ごたえを感じているわけではないが、何かあったときに、なるべく思考をとめない方向に考え方を変えようとしていることは今後につながる

ると思う。また、課題としては、中身のある質問が多少なりともできるようになることと、年間のスケジュールをおさえながら、大まかな段取りから、小さな段取りまでたてられるようになることの 2 点が大きく挙げられる。次につなげられる形で業務を行うことが重要であるため、上記の 2 つをまず意識して取り組んでいきたいと思う。

最後に振り返りを行ってみて、上記のことができていないということは、あらゆる意味で与えられた業務に責任をもって取り組めていないということなので、その点も志をもって取り組めるよう、何より仕事を楽しみながらできるよう頭を使っていきたいと思う。